

# 北東アジアから北米大陸沿岸部における完新世初頭の 小型尖頭器に関わる技術分析

長 井 謙 治

東北芸術工科大学芸術学部歴史遺産学科 専任講師

## はじめに

アジアから北米にかけて分布する尖頭器の地球上の分布域は、自然人類学等が明らかにした新人の移動／拡散ルート上にはほぼ位置しており、日本列島・ロシア極東域の尖頭器が北米へのモンゴロイドの移住／拡散プロセスを解く重要な遺物として考えられるようになっていく<sup>1,2,3,6)</sup>。しかし、新たに発見された考古学的証拠によって、人類移動ルートの修正が図られることがあっても、歴史的により本質的で重要な「伝播の中身」については十分に明らかにはなっていない。その理由は、これまでアジア諸国で別々の基準に基づき研究が進められてきたため、国を横断して一律に比較できる指標に乏しく、作り手の視点が欠如していたためと考えられる。

筆者を含むここ数年の研究の進展によって、完新世初頭の日本列島域に“左肩上がり”と“右肩上がり”に異なる加工癖のある石器が地理的に分かれて分布することが判明している<sup>4,5)</sup>。この成果を踏まえ、本研究においては、「左肩上がり」が人類移動の指標として有効であるかどうかを確認することを目的とした北米西海岸部における研究動向の整理と資料調査を実施した。具体的には、北米西海岸部を対象とした近年の沿岸移住仮説をレビューしたうえで、石器製作技術の実験考古学的検討を加えた。これらの検討は、将来的に更新世末期から完新世初頭にかけての縄文時代開始期の社会変化、および北米大陸へ移住した人類の移動の軌跡を、北東アジアという大地域の歴史動態の中で相対化するための予備的試みとなる。

## 研究の背景：北米西海岸部における最近の研究動向

近年、オレゴン大学研究チームによって北米先住民研究における「沿岸移住仮説」の考古学的検証が精力的に行われている。この仮説をサポートする北米大陸沿岸部における第四紀学的なデータが公表されており、気候変動によって約13,000年前にチャンネル諸島がひとつの

細長い島になったこと（ただしサンタバーバラ海峡は存在）、ブリテッシュコロロンビア沖の更新世末から完新世初頭にかけては、昆布を中心とした豊かな海産資源が沿岸部に広がっていたことなどが指摘されている。沿岸生態系資源を獲得した海洋適応型のモンゴロイドが、初期北米先住民の形成に加担したと考えられている<sup>2)</sup>。

考古学的証拠としてはチャンネル諸島で顎付尖頭器の発見が相次いでおり、それらが日本列島の縄文時代草創期における有舌尖頭器と類似しているという研究結果が、上記の仮説を支持するものとして重要視されている<sup>3)</sup>。この仮説は年代的傾斜を一つの根拠としている。例えば、日本の有舌尖頭器の盛行時期が暦年較正年代で約15,500年前（神奈川県花見山遺跡、同三ノ宮・下谷戸遺跡等の所謂「花見山型」有舌尖頭器が隆起線文土器に伴うことを前提）、北米西海岸部における有舌尖頭器の出現時期が暦年較正年代で約11,500～13,000年前（オレゴン州パイブリー洞窟、デイジー洞窟、カリフォルニア州チャンネル諸島のCA-SRI-512遺跡等の暦年較正年代を参照）であることを根拠として、前者から後者への文化伝播を説く。

しかしながら、この大胆な仮説にも細部において問題点が見受けられる。例えば、東アジア地域における狩猟具出現の速さを主張するあまりに、朝鮮半島や日本列島西南部における後期旧石器時代の剥片尖頭器を有舌尖頭器の祖形として理解している<sup>3)</sup>。しかし、この点については、後期旧石器時代の所謂「剥片尖頭器」と両面平坦加工を施した縄文時代草創期の「有舌尖頭器」との間には剥離技術プロセスと消長時期が明確に異なるという事実が軽視されている。その両者の系統関係についてはいまだ解決されない問題がある。東アジアを顎付尖頭器製作伝統の発祥地（起点）とみなすには時期尚早であろう。

無論、日本式の小型有舌尖頭器の北米西海岸部への伝播・拡散を論じるには、ブラックボックスとなってい

る地理的領域が広く存在する点も看過できない。例えば、北東アジアにおいてさえ、サハリン以北における小型有舌尖頭器の不在をいまだ明快に説明できない。北米西海岸部の顎付尖頭器と形態上最も類似している所謂「花見山型」有舌尖頭器は、日本列島東半部以北には稀薄である<sup>5)</sup>。加えて、北海道以北における細石刃核石器群と有舌尖頭器石器群との棲み分けについてもまた、その実態は不明瞭である。これらの問題群に対する考古学的な考察を抜きにして、小型有舌尖頭器のみを対象とした素朴な形態的類似と年代的傾斜、地理的環境などを根拠とした日本列島域を起点とする北東アジア沿岸域への文化伝播・拡散を説明することはできない。

以上の意味において、本研究においては、実験考古学に基づき作成した“右肩上がり”と“左肩上がり”といった石器製作技術指標を用いて、北米西海岸部における資料を対象とした実見調査を計画した。

#### 研究の成果と展望：チャンネル諸島における顎付尖頭器の技術分析

サンタローザ島の北西海岸部に位置するCA-SRI-512遺跡からは100点以上の逆刺（顎）が付いた小型の尖頭器が検出されており、それらはチャンネル諸島顎付（CIB）尖頭器と総称されている<sup>2,3)</sup>。この尖頭器には、所謂日本式の有舌尖頭器や半月形石器、その他の両面加工石器が含まれている。その他に赤色顔料、骨製ツール破片、鳥・海獣・魚骨等が出土しており、全遺物の帰属年代はおよそ11,800～11,500 cal BPである<sup>2)</sup>。厚さ平均2.9 mm程の薄みの小型有舌尖頭器が主体であり、これらの小型有舌尖頭器と半月形石器は、日本列島の関東地方において見つかる花見山型、小瀬が沢型に形態上は類似している。小型有舌尖頭器と半月形石器は、弓矢使用としてあるいは海産動物資源を対象として特殊化させたダーツ使用のための狩猟具である可能性がある<sup>6)</sup>。

CA-SRI-512遺跡出土小型有舌尖頭器と半月形石器5点（オレゴン大学自然・文化史博物館蔵）、ニューメキシコ州ツインブート遺跡、ワイオミング州パークカウンティ出土のチャート製フォルサム型尖頭器2点、カリフォルニア州レークカウンティ出土の黒曜石製クローヴィス尖頭器1点（アメリカ自然史博物館蔵）の押圧剥離技術の比較分析のための基礎的情報を獲得する為に器面上に残された最終的剥離面の傾きの観察と切り合い関係を分析した。

その結果、CA-SRI-512遺跡出土のチャート製半月形

石器1点表裏面にLR-斜行剥離（左肩上がりの剥離痕）を確認した。また、CA-SMI-678E遺跡出土のチャート製有舌尖頭器1点片面でLR-斜行剥離（左肩上がりの剥離痕）を確認した。CA-SRI-512遺跡出土のチャート製半月形石器からは右辺と左辺で先端部から基部に向けて最低2枚の連続する剥離痕が確認された。また、CA-SMI-678E遺跡出土のチャート製有舌尖頭器1点からはLR-斜行剥離（左肩上がりの剥離痕）が見られた面の左辺で先端部から基部に向けて最低3枚の連続的に施された剥離痕を確認した。

以上の顎付尖頭器に見られた剥離パターンを比較検討する為に、北米本土のほぼ同時代の遺跡から出土した20点のフォルサム・クローヴィス型尖頭器の剥離痕分析を試みた<sup>7)</sup>。風化の状態などから切り合い関係までを観察できたのは、そのうちの12点にとどまる。結果、ワイオミング州パークカウンティ、カリフォルニア州レークカウンティ出土の有楯尖頭器から斜行剥離痕は確認できなかったが、ニューメキシコ州ツインブート遺跡、ミシガン州ラビット遺跡出土のフォルサム・クローヴィス型尖頭器において、LR-斜行剥離痕が確認できた。パークカウンティ出土のチャート製フォルサム型尖頭器からは、基部から先端部にかけて一方向に連続的に施された最低6枚の剥離痕が観察され、片面右側の縁辺部には基部から先端部にかけて一方向に連続的に施された8枚の剥離痕が確認できた。パークカウンティのフォルサム型尖頭器においては、左右両側の辺で先端部に向けて加工が施されており、このパターンはラビット遺跡出土のチャート製フォルサム型尖頭器にみる剥離順序と同等の傾向を示すといえる。今回分析し得た各種フォルサム型尖頭器にみる剥離順序は、チャンネル諸島における顎付尖頭器の剥片剥離順序とは異なる。ただし、共にLR-斜行剥離を部分的に持つという点では類似する。

#### 要 約

本研究ではこれまで国内資料を対象として筆者が作成した指標が広く東アジアを越えて同時代の国外資料に適用可能かどうか、当該分野において研究の進展が目覚ましい北米西海岸部の資料の観察を通して、その可能性を探った。今回調査においては、渡航日数が限られたため、一定の石器製作伝統の地理的分布域を導出するまでには至らなかった。ただし、ここで結果は、今後同種の分析を継続・蓄積させることにより、日本列島という「現代」の地理的枠組みを越えて、シベリア・北米へと

分布する“斜めの加工”というものが、複数文化間の接触や交差を横断的に捉えようとするときの揺ぎない物的指標になることを示唆している。ここでの成果を将来、遺伝学的な研究成果と突き合わせることにより、北米への人類移住の歴史的要因を解明する糸口が得られると予測できる。

## 謝 辞

本研究を遂行するにあたり、公益財団法人三島海雲記念財団より助成を賜った。心より感謝申し上げます。文献収集において東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室の図書室を利用させて頂いた。また、資料見学においては、オレゴン大学自然・文化史博物館Jon M. Erlandson教授、サンディエゴ州立大学人類学科Todd J. Braje准教授にお世話になった。現地案内にはJack L.

Watts博士、ニューヨーク州立大学ストーニ・ブルック校人類学科Ian Wallace博士にお世話になった。ここに記してお世話になった皆様に深く感謝申し上げます。

## 文 献

- 1) B. Fagan: *Before California*, Altamira Press, 2003.
- 2) J. M. Erlandson, et al.: *Science*, **331**, 1181–1185, 2011.
- 3) J. M. Erlandson, T. J. Braje: *Quaternary International*, **239**, 28–37, 2011.
- 4) K. Nagai: *Anthropological Science*, **115**(3), 223–226, 2007.
- 5) 長井謙治：石器づくりの考古学—実験考古学と縄文時代のはじまり—, 同成社, 2009.
- 6) J. M. Erlandson, et al.: *American Antiquity*, **79**(1), 162–169, 2014.
- 7) M. Shott: *Memoirs Museum of Anthropology, University of Michigan*, **25**, 1993.